

## 封建勢力と農本主義運動

—— 庄内山居倉庫を事例として ——

弘前大学 武田共治

日本の耕作農民の思想と行動のリアリティーに迫ろうとした社会思想の一つとして、農本主義がある。とりわけ戦前国家独占資本主義期における代表的農本主義者として、権藤成卿、橘孝三郎、加藤完治がいたが、岡田温、石原莞爾などにもその傾向が指摘できる。彼らの思想の特徴点を整理すれば、①勤労主義、②小農主義、③家族主義、④農業主義、⑤愛国・日本主義ということになるろう。

この農本主義を批判的に検討した桜井武雄は、農本主義を、(1)封建時代の農本思想(石川理紀之助など)、(2)原著時代の農本主義(品川弥二郎など)、(3)資本主義興隆期の農本主義(横井時敬、酒匂常明など)と歴史段階的に捉え、(4)その後の農本主義として、①小ブルジョワ農本主義(橘孝三郎)、②地主＝『村塾』型農本主義(山崎延吉、加藤完治)、③地主＝『帝農』型農本主義(岡田温)、④官僚型農本主義(小平権一)を区分した。

確かに、農本主義といっても重視する論点の違い、依拠する農民層の違いなどにより多様性がある。また封建的、地主的、農民的、資本家的といった矛盾性もある。さらに、確固たる理論体系を有するとも言えず、いかなる社会勢力との関わりを持つかといった具体的な状況に応じて、具体的な行動をとるといった状況規定性がある。これは、農本主義が勤労農民の抱く「感覚、心情、考え方」の思想的表現であって、どの様な立場からいかに表現するかで異なってくるからであろう。

そのような観点から、戦前国家独占資本主義期の農本主義として、①封建思想的農本主義(権藤成卿)、②勤労農民的農本主義(橘孝三郎、加藤完治)、③国体主義的農本主義(岡田温、石原莞爾)などが区分できると考えている。

ところで、様々な立場から勤労農民の抱く「感覚、心情、考え方」を思想的に表現しようとしたのは、それぞれ異なった立場から勤労農民を捉え、それぞれに彼らの支持を得ようとしたからに他ならない。

そこで、本報告では、封建思想的農本主義を検討の対象とする。具体的には山形県庄内地方の山居倉庫の創業、その推進思想となった旧庄内藩主酒井家を中心とする「御家祿派」の郷学思想を見ることで、封建勢力が近代日本において、どのように生き延びようとしたのか、そこに農本主義がどう関わるのかを検討することをめざしたい。

なお、庄内地方には、加藤完治の影響も広く見られる。加藤は山形県立自治講習所の初代所長であり、山木武夫、渋谷勇夫といった弟子たちは地主の経済力からの産業組合自立化運動を展開し、農業倉庫を建設した。この農業倉庫が山居倉庫と激しい対立関係となったことは言うまでもない。この加藤の農本主義、及び山木たちの農本主義と、封建思想的農本主義としての郷学思想との差異や共通性などについても、必要に応じて言及することにしたい。